



# 日造協ニュース

2026.1月  
通巻 第622号

Japan Landscape Contractors Association NEWS

発行：一般社団法人日本造園建設業協会 編集：広報活動部会 <http://www.jalc.or.jp>  
 〒113-0033 東京都文京区本郷3-15-2 本郷二村ビル4階 TEL:03-5684-0011 FAX:03-5684-0012

本号の主な内容

## 新春特別号

2026年  
新春座談会

2027年国際園芸博覧会にかける思い  
参加への期待と今後の展望を語る



©Expo 2027



## 新・日本の街路樹100景「マキノメタセコイア並木」 滋賀県高島市マキノ町

カタカナ表記日本初であるマキノ町に、1981年（昭和56年）マキノ町果樹生産組合が国内ではまだ珍しいメタセコイアを防風林として1.8km（440本）を植栽し、翌年続く県道にも地元が植栽を行い、総延長2.4km（東京駅～秋葉原駅間と同じ）、約500本に及ぶメタセコイア並木が完成した。

植栽時、樹高2m程度の苗木が、樹高は約25m、幹周1.8m位までに育ち、道路が貫通したことから、果樹園の防風林が街路樹（並木）となった特殊な例ですが、春の新緑、夏の木陰、秋の紅葉、冬の落葉。四季それぞれに雄大な姿を誇示し、左右の樹木の枝が重なり長い緑のトンネルとなっています。1994年には読売新聞社の「新・日本の街路樹百景」に選定され、以後、CMやドラマ等で紹介もされ多くの観光客が訪れています。

落ち葉や台風による倒木、オーバーツーリズム等の問題も発生していますが、地元住民や周辺関係団体の理解と協力で自然樹形のままで維持管理されています。



こうした中、日造協では、各種委員会や講習会を通じ資格制度の運用や建設キャリアアップシステムの活用を図り、働き方改革の推進に取り組むと共に、関係機関と協議を重ねよりオーソライズされた、樹上安全作業マニュアルの発刊を通じ、労働安全の改善を目指してまいりました。さらに昨年12月には建設業法改正に伴い標準労務費が導入され、適正な施工体制の確保や働き手の待遇改善に向けた環境整備が一層進む契機となりました。

私達は造園の専門性を活かし、国が掲げる「持続可能で安心できる地域づくり」に貢献できるよう、協会としても行政や関係団体との連携を一層強化してまいりたいと考えております。そしてなんといっても本年は、令和8年の正月を、皆様方におかれましては健やかにお迎えのことと、心よりお慶び申し上げます。

旧年中は、協会の諸活動に格別のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

昨年を振り返りますと、国内外で自然災害や気候変動の影響が一段と顕著となり、豪雨や猛暑、台風などが生活や社会基盤に大きな影響を及ぼしました。

地球規模で進む気候変動は、私たち造園業にとっても避けて通れない課題であり、「みどりの力」を生かした環境づくりの重要性がこれまで以上に高まっており

ます。

また、資材価格の高騰や人材不足、労働環境の改善など、業界を取り巻く環境も依然として厳しい状況が続き、協会運営においても難しい問題が山積した一年でした。

こうした中、日造協では、各委員会や講習会を通じ資格制度の運用や建設キャリアアップシステムの活用を図り、働き方改革の推進に取り組むと共に、関係機関と協議を重ねよりオーソライズされた、樹上安全作業マニュアルの発刊を通じ、労働安全の改善を目指してまいりました。さらに昨年12月には建設業法改正に伴い標準労務費が導入され、適正な施工体制の確保や働き手の待遇改善に向けた環境整備が一層進む契機となりました。

私達は造園の専門性を活かし、国が掲げる「持続可能で安心できる地域づくり」に貢献できるよう、協会としても行政や関係団体との連携を一層強化してまいりたいと考えております。

そしてなんといっても本年は、令和8年の正月を、皆様方に



一般社団法人 日本造園建設業協会

会長 和田 新也

## 令和8年の年頭にあたつて

この博覧会は、造園の魅力や技術の価値、そして「みどりの持つ力」を国内外に発信する絶好の機会であり、私たち造園業界にとって大きなビジネスチャンスとなります。

本年は壬午の「午（うま）」の年であります。馬は古来より、人とともに働き、道を切り拓いてきた存在であり、「力」「誠実」の象徴とされています。

勢いよく駆けるその姿は、困難を恐れず、確かな志をもって未来へ進む力強さを私たちに示しています。

昨年は、副会長の田丸敬三氏のご逝去という、大変残念な出来事がございましたが、会員が力を合わせ、次代へと向かう年としたいと存じます。これまで積み重ねてきた努力を礎に、新たな挑戦へと踏み出す一年といたしましょ。

結びに、会員の皆様のご健勝とご多幸、そして造園業界のさらなる飛躍を心より祈念申しあげ、新年のごあいさつとさせていただきます。





たが、電力をはじめ、ユニバーサルデザインの対応から動線の確保も厳しく、夢から現実といった話になると、課題は多くありますが、園芸博として、Well-Being や花と緑を掲げながら、暑くてダメでしたということにならないように、木陰の涼しさを体感、検証することができれば大きな樹木を配置できれば良いのですが、撤去の問題もあり、難しいということになってしまいました。

日差しを避けるためのテントという考え方もありますが、テントもそれ自体が逆に 40 度を超える熱源になってしまいテントの下でも涼しくありません。木陰

次世代継承  
社会貢献…

## 展示を通じたメッセージ

**司会** いろいろな話が出てきましたが、社会への貢献や次世代への継承、展示を通じたメッセージなど、参加を通じて果たしたい役割をお伺いできますか。

**古積** 東北の魅力を国内外に発信するとともに、その架け橋になりたいです。来場された方が、東北にぜひ行ってみたい、と思える空間を演出して、観光、文化、交流の起点となることを目指しています。

そして、未来を担う若い人が誇りと夢を持てる機会にしていきたいと思っております。

**岩井** 造園業界は、なり手不足が深刻な問題です。造園を学びながら業界に来てくれないことに危機感を感じているので、それを好転させる機会にしたいと思います。

一方で、先日、令和 7 年の日本学校農業クラブ全国大会に参加いたしましたが、全国の農業・園芸高校生の思いもプレゼンテーションも大変素晴らしい、感動いたしました。農業・園芸高校の先生方も非常に熱心ですし、今回の園芸博において、将来を担う若い方々と共に、私たちが一緒になって何かを創り出して、将来に繋げたいと感じました。

**鈴木** 身近な自然がいかに重要なかをお話しましたが、そういう拠点をたくさんつくりつなげて、いわゆる生態系ネットワークを社会に提案するとともに、毎年行っているビオトープフォーラムを横浜で開催し、フォーラムを通してマスコミ

は、葉の蒸散作用もあるので、28 度くらいにしかならず、圧倒的に涼しく、本当は木陰をたくさんつくって、みどりはいいねという声を聞きたいところです。

こうしたみどりは、美しいだけでなく、機能的にもすごいということを分かって欲しいのですが、どう分かっていただけるかが課題で、鈴木さんのビオトープで体感してもらえるといいですね。

モデルルートみたいなものをつくって、生物多様性はこのルートとか、それをつくるのは大変ですが、そういうものがあつてもいいと思います。

にも訴えていきたいと思います。

また、地元にはいろいろな団体がありますが、予算を確保してもらって、視察してもらうことも考えています。

**中村** 造園業界で働きたいと思ってもらえるような魅力を発信したいです。就職活動をしている学生の話を聞くと、設計をしたいという人は結構多かったりします。しかし、施工をやりたいという人が少ないので残念です。私たちがつくるものは、現場があつてこそ、そのための設計なので、まずは造園が生み出しているものの素晴らしさを感じてもらい、そういうものをつくりたいと思っていただけます。できれば子どもたちが将来のなりたい職業として、造園を挙げてくれるようになれば嬉しいですし、そこまでは難しくとも、造園に興味を持つてもらえるような取り組みをしたいと思います。

**和田** みどりの効用というか価値はあまりにも多様で、その一部の CO2 を取り上げると、都市のみどりでは規模が小さいと一蹴されてしまったりします。しかし、景観や木陰の涼しさ、メンタルケア、防災などを考えると、感覚ではなく現実的にその価値はものすごく大きく、園芸博では、こんなことも、あんなこともとみどりの価値をしっかり分かっていただける機会にしたいと思います。

これだけの規模のイベントは滅多なく、海外でもこんなことしていると直接伝えられる機会もあるので、海外出展にも期待しているところです。

要にもつながれば良いと思います。

**古積** 園芸博は、造園業界にとって“技術と地域資源を未来へ繋ぐ大きな転機”になると感じています。

私たちが長年培ってきた技術や、地域の自然・文化を国内外に発信できる場であり、若い世代にこの仕事の魅力を伝える絶好の機会でもあります。

また、園芸博をきっかけに、地域の緑地管理や観光と連動したプロジェクトが増えれば、造園の仕事は「つくる」だけでなく「育て、活かす」方向へ広がります。

地元の企業や行政と連携しながら、持続可能な緑のまちづくりに貢献できる業界へと成長していかなければと思っています。

**司会** 都市緑地法の改正の話もありましたが、優良緑地確保計画認定制度(TSUNAG) の 3 つの課題は、気候変動対策、生物多様性の確保、Well-Being で、園芸博の課題と通じます。造園業としてこの 3 つにもっと積極的に関与できないかと思いますが、いかがですか。

**岩井** 私たちは造園業として仕事をしてきて、勿論、今後も続けていきますが、

範囲としては環境ビジネスに広げていく必要性を感じております。環境ビジネスであれば、3 つの課題に対応するのは当然ですし、仕事が環境ビジネスという範囲となれば、若い人も興味を示してくれると思います。

また、こうした課題に取り組む際の専門分野として、造園が法制化などによって認められると、社会の見方も私たち自身も役割が明確になると思います。

**和田** 環境関連の制度などに対し、デベロッパーをはじめ、多くの民間企業は相当敏感です。

成家広報部会長のところで施工された木場の工場跡地のビオトープにはカワセミが巣をつくり、その巣を襲うヘビまで生息している、そういった空間を民間企業が維持管理まで行っています。これに伴う価値、さらにいうと経済価値を企業が理解をしてお金をかける、投資をしています。

園芸博でこういうものを示して、その経済価値を証明できれば、もっとつくりたいという企業が出てくると思います。

## 造園業がメインストリームに

**司会** 大阪花博の後、ガーデニングブームがあり、造園業が賑やかだったような気がしますが、2027 年の園芸博後、環境ブームで造園業が



賑やかになれば伊藤 康行 氏

いなと思つたりします。ここからは自由にお話いただければと思います。

**鈴木** 和田会長のお話の通り、大企業は常に時代の先をみて動いています。

一昨年の環境白書だったと思いますが、生物多様性の取り組みの仕組みを経営理念の中に加えてくださいと企業に通達したことが書かれていました。

愛知県は、愛知万博や COP10 など、環境に対しての取り組みを先進的にしてきたこともあります。民間企業でもトヨタ自動車が 2015 年に「トヨタ環境チャレンジ 2050」を発表し、工場の緑地を再編、そこにビオトープをつくる、すべてをネットワーク化していくことを掲げています。

そして、これはトヨタ自動車だけにとどまらず、一次、二次メーカーにも波及します。環境対応は日本だけの問題ではなく世界の問題ですから、世界を視野に入れている企業の対応をみても、環境が単純にいいイメージだからではなく、ビジネスに欠かせないものであることが分かります。

**岩井** トヨタさんなどのそうした発表には相当な裏付けがあり、一度打ち出したら、その取り組みを着実に進められると思います。そうしたものを担えるのは私たち造園で、知識と技術、そして経験が必要で、管理も不可欠です。

当社も日本ビオトープ協会の会員で、ビオトープの施工や管理をしていますが、図鑑と向きあって現場にいた在来昆虫を調べているスタッフもあり、既にそういうことも造園の仕事になっています。

園芸博の後の造園業というお話がありました。先程も言いましたが、造園が私たちのベースですが、環境ビジネスに携わっていることを、もっとアピールすると、それがビジネス拡大に繋がっていくと感じています。

**司会** 和田会長のところでもビオトープ事業はされていましたよね。

**和田** よく話に出てくるのは東京・世田谷の二子玉川ライズで、視察の希望など民間の方々が注目していることが分かります。先ほども話しましたが、こういうものを私たちがいかに経済価値に置き換

えることが出来るか。学会等の論文も随分出でおり、いろいろな機能、効果、経済効果に対する証明がなかなか社会的認知に至っていません。

**古積** 今後益々、環境への関心が高まり、造園が“流行”ではなく“地域に必要な産業”として定着していかなければと思っています。

これからは、緑地づくりだけでなく、維持管理や防災、生態系回復など、社会課題の解決に造園の力が不可欠な時代です。そして何より、この未来をつくるのは若い世代の皆さんです。

造園は、地域のくらしを良くし、自然を次の世代に残していく、大きなやりがいのある仕事です。園芸博を追い風に、若い力がこの業界に加わり、一緒に新しい流れをつくっていけたらと思っています。

**中村** 国の認定制度の話がありました。当社の君津グリーンセンターが環境省の自然共生サイトに認定され、当社のお客様で環境省の自然共生サイトと国土交通省の TSUNAG の両方に認定されているところもあります。一方、これまであった緑の認定制度にメリットを感じられず、継続をやめたお客様もいます。様々な認定制度があるのはいいのですが、できれば一元化してお客様が申請しやすい制度になって、そこに経済価値が示されるとさらにいいと思います。

工場緑地の再編の話がありました。かつて当社が施工した工場の緩衝緑地で、植えられていた外来種を潜在自然植生種へ置き換える活動をしているところがあります。また、既存の緑地を活用して賑わいを創出しようとする取り組みを始めたところもあり、今後はそのようなビジネスも期待できると思います。

**和田** 中村さんがおっしゃられた「どう活用するか」は、これからものすごく大事になってきます。

造園業は、現在建設業であるとともにサービス業にもなっています。良い空間を創るだけでなく、いかにその空間を活用するか、どう演出し、利用してもらおかも大変重要なになってきます。そして、環境ビジネスとしてのお話も出てきました。

そういったことをいろいろ試行できるのが園芸博であり、園芸博の中できまざまなチャンスがあるのではないかと思っています。

**司会** 造園業がメインストリームに入つていて欲しいと思っています。そのためにも皆様の出展が大成功となるよう祈念いたしますとともに、造園業界全体で園芸博を盛り上げていければと思っています。本日はありがとうございました。

## 園芸博を契機とした業界の展望

**司会** 園芸博を契機とした業界の展望についてのお考えを鈴木さんからお聞かせいただければと思います。

**鈴木** 繰り返しになりますが、今回の園芸博やビオトープを一つのビジネスチャンスと捉えています。

和田会長がおっしゃられたように、みどりの機能と効果は多大で、造園が取り扱える分野は間違なく増えています。ただ、これをどう働きかけるかが確立されません。

例えば、猛暑が続くと、少ししか樹木が植えられていない公園では、みどりの機能が生かせていない場合もあるので、公園や街なかのみどりを 10% 増やしたらどうなるかを考え、10% 運動の展開につなげることが、園芸博のさまざまな提案を根拠にできるかもしれません。

また、私たちはビオトープを提案しますが、造園の仕事の一部にすぎません。しかし、これをみた来場者が魅力を感じ、造園の仕事をしたいと思っていただけたら、その可能性は大きく広がります。

実際に造園の仕事をみて、他業種の方がこういう仕事をしたかったと入職したり、新卒の方もこんな仕事をあることを知らなかったと入職した人もいます。

造園は社会に不可欠で、しかも魅力的な仕事なのですが、まだまだそれが知られていないことが一番の問題です。園芸博はそれを伝えるまたとない機会ですので、精一杯訴えていきたいと思います。

**岩井** 鈴木さんがおっしゃったように、ビジネスチャンスとしてどう生かすかが私たちにとって一番大きな課題です。

そのきっかけが、ビオトープやグリーンインフラだったり、いろいろあると思います。提案の際に 1 社だけでは難しいので、日造協をはじめ、さまざまな関連団体とタッグを組んでやっていくのがいいと思っています。

そして、その取り組みや事例を蓄積して公開すると、発注者の方々がそれをみて、うちの学校に、公園にビオトープ、グリーンインフラをと採用してくれたり、仕事になれば、それを担える会社が増えます。園芸博をそういう好循環を生み出すきっかけにしたいと思います。

**中村** 環境問題への関心の高まりにより造園業の需要も高まると思います。今より人手になると賃金が上がることが想定され、経営を考えると頭が痛いですが、造園業は他の業種に比べて賃金が高くはないので、そのあたりも改善されるといいと思います。

また、園芸博には海外からの来訪者が見込まれています。海外で認められるとステータスが上がるというところがあるので、そんなところにも期待しています。

日本の造園技術は世界に引けを取りませんし、これまで戦災、震災など多くの災害から復興してきたことは何よりの実績です。こうしたものを海外にアピールすることで、日本に造園事業を頼みたいという需

要にもつながれば良いと思います。

**古積** 園芸博は、造園業界にとって“技術と地域資源を未来へ繋ぐ大きな転機”になると感じています。

私たちが長年培ってきた技術や、地域の自然・文化を国内外に発信できる場であり、若い世代にこの仕事の魅力を伝える絶好の機会でもあります。

また、園芸博をきっかけに、地域の緑地管理や観光と連動したプロジェクトが増えれば、造園の仕事は「つくる」だけでなく「育て、活かす」方向へ広がります。

地元の企業や行政と連携しながら、持続可能な緑のまちづくりに貢献できる業界へと成長していかなければと思っています。

**司会** いろいろな話が出てきましたが、社会への貢献や次世代への継承、展示を通じたメッセージなど、参加を通じて果たしたい役割をお伺いできますか。

**古積** 東北の魅力を国内外に発信するとともに、その架け橋になりたいです。来場された方が、東北にぜひ行ってみたい、と思える空間を演出して、観光、文化、交流の起点となることを目指しています。

そして、未来を担う若い人が誇りと夢を持てる機会にしていきたいと思っております。

**岩井** 造園業界として仕事をしてきて、勿論、今後も続けていきますが、